

ある子供の理解

—ヘレン・ケラーがはじめて「死」と出会ったとき—

ミリアム・T. ブラック

はじめに

ウィンストン・チャーチルはヘレン・ケラー（1880-1968年）を「われわれの時代の最も偉大な女性」と呼んだ。ヘレン・ケラーが視聴覚障害者であるにも関わらず言語を迅速に習得したこと、そしてそれが彼女の精神的発達に影響を及ぼしたことは、今日に至るまで研究者の興味をそそるものである。本論では、はじめにヘレン・ケラーとその先生であるアン・サリバンについて短く紹介し、そしてヘレン・ケラーがどのように言語を学び、また言語の使用が増えることによってどのように自分自身をとりまく世界を理解する力が高められたかについて概説する。そのあとでヘレン・ケラーの自伝から、彼女が抽象的な概念を次第に理解するようになったこと、そして「死」というものに最初に出会ったときのことなどが述べられている箇所をいくつか取り上げて論じる。

1. ヘレン・ケラーの言語習得の特徴

アメリカの作家マーク・トウェインはかつてこう記している。「19世紀の二人の最も偉大な人物はナポレオンとヘレン・ケラーである。ナポレオンは武力で世界を征服しようとして失敗した。ヘレンは精神の力で世界を征服しようとして成功したのである！」この二年間、言語教育と言語習得に関する研究の一端として、私はヘレン・ケラーの人生について学んできた。彼女は実にすばらしい人物であったが、彼女の精神は彼女がひとりで育んだわけではなかった。その精神の育成は彼女の教師アン・サリバンとの交流を通して起こり、そしてサリバンによって、言語を理解し、使用する彼女の卓越した能力が出現したのである。

筆者は、子供時代からのヘレン・ケラーとサリバンの基本的な事柄は知っていたが、それを深く研究しはじめたのは最近のことである。当時私は迅速な言語習得の例を探していた。一つ一つの例を調べることによって、それぞれの成功の過程を遡り、それを取り巻く諸条件と組み合わせることができると考えていた。これらの習得の諸条件は、まず私の授業のなかで教えるときに試そうとしていた。なぜならそれらはすでに成功することが証明されているからである。

ヘレン・ケラーが受けた教育を研究対象として選んだのは、彼女がとても早く（たった数ヶ月の間に）言語を使うことを学んだからというだけでなく、まだ7歳になる前でもあり、なおかつ見ることも聞くことも話すこともできなかったにも関わらずに学んだからである。これらは確かに乗り越えることが非常に困難な境遇であった。事実、ヘレン・ケラーの時代の多くの人々は、視聴覚障害者が言語を使うことを習得したり、そのための教育を受けたりすることはほぼ不可能であると信じていた。もちろん今日では、それが全くの間違いであることを知っている。

ヘレン・ケラーとサリバンは大変興味深い人物であるため、彼女たちについての多くの事柄が他の人々によって記されてきた。しかしながら私の研究のためには、サリバンとヘレン・ケラーが実際に何をしたのかについて、そしてその交流の結果についてなるべく的確な説明を見出す必要があった。最もよい証言は第一次資料であり、ヘレン・ケラーによる初期のスピーチ（それは後で詳しく述べるように、彼女が指文字でアルファベットを作ることによってなされた「スピーチ」であり、彼女の声によってなされたものではない）と彼女が長年にわたって書いたものの実例を含むもの、さらにはサリバンがどのようにヘレン・ケラーと交流したかについて説明したものである。私の研究の大部分にとって、1903年に出版されたヘレン・ケラーの自伝『私の生涯』(*The Story of my Life*)¹⁾以外のものを見る必要はなかった。

この原書は三つの部分から構成されている。第一部はヘレン・ケラーのそれまでの人生を自身で説明したもので100ページ以上にもなっている。彼女はそれを書いたとき二十代はじめの大学生であった。第二部は1887年から1901年までの間に、ヘレン・ケラーが他の人に宛てて書いた手紙を編集したものである。彼女の最初の手紙は、彼女の先生アン・サリバンと出会ってから、わずか三ヶ月しか経っていないころに書かれている。第三部は、「へ

レン・ケラーの生涯と教育の補足的説明」と題されているもので、まさにこれこそがすべての教師にとっての宝である。その中の最も興味深い部分には、サリバンがヘレン・ケラーを教え始めた 1887 年の春から二年間にわたって、彼女がある親しい友人に送った手紙を選んで集めたものが含まれている。そこにはサリバンがそれぞれ 1887 年、1888 年、1891 年に書き送ったヘレン・ケラーの進歩を記した三つの短い報告がある。私がこの論文にのせるために選んだものはすべてこの第三部に記されている。しかしながら第一部から第三部までが一緒に検討されたとき、サリバンが行ったこととヘレン・ケラーの目覚しい進歩の様子を、誰もがたやすく正確な時系列のなかに置くことができるようになる。

2. ヘレン・ケラーとアン・サリバンの生い立ち

ヘレン・ケラーの生涯については、すでによく知られているかもしれないが、彼女がどのように言語を習得したのかを理解するためにはまず、きわめて重要となる彼女の生い立ちについて説明したい。ヘレン・ケラーは 1880 年にアメリカ合衆国南部のアラバマ州で生まれた。彼女は活発で健康な子供であったが、19 ヶ月（1 歳 7 ヶ月）のときに病気になる、目が見えなくなり、耳が聞こえなくなったために、話すことを習得できなかった。この時から、7 歳近くになって彼女の先生に初めて会うまで、彼女は基本的に必要なことを伝えるためにいくつかのサインを作っていた。しかし成長するにつれて、彼女の身振りのシステムでは不十分になり、意思を伝えられない彼女の欲求不満がつづいて毎日どころか毎時間でさえ感情の激しい爆発を示すまでになっていた（Keller 2003a, p.14）。²⁾

多くの人々は、ヘレン・ケラーの先生であるアン・サリバンについてはあまり知らされていない。彼女はアメリカ合衆国北部のマサチューセッツ州の貧しい家庭に生まれ、幼いときに視覚に障害をもった。彼女の父親はアルコール依存症で、病気がちだった母親は彼女が 10 歳になる前に亡くなった。母親が亡くなった後、彼女と弟は親戚によって、州営の療養所であり救貧院でもあるチュークスバリー救貧院へと送られた。彼女の弟はその後まもなくそこで亡くなった。幼い子どもの頃に彼女は学校に通ったことはなかったが、新聞や手に入れられる本を誰かが読み聞かせてくれたことによって世の中についての情報を得ていた。彼女はまた救貧院の住民による時事や政治に

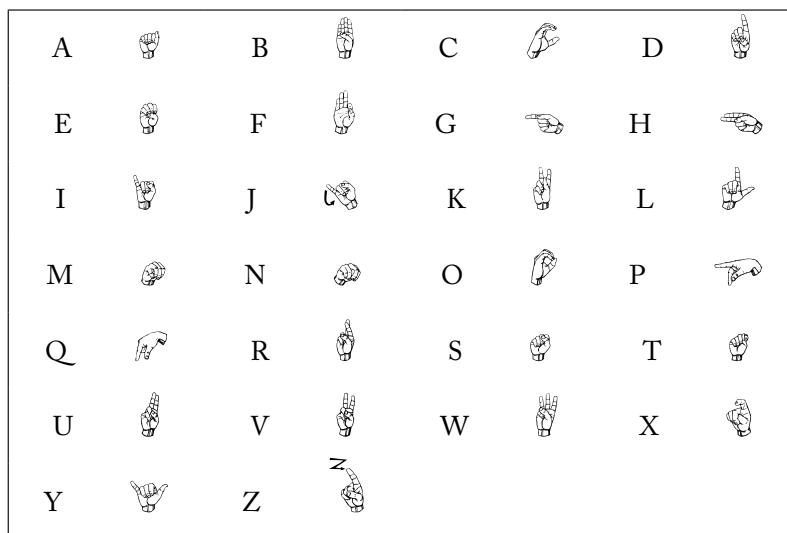
ついでの討論に接し、しばしばそれに参加していた (Braddy 1934, p.40-41)。

彼女はすでに 14 歳になっていたが、ボストンの視覚障害者のためのパーキンス盲学校で正式な教育を受け始めた。彼女がその学校に入ったときには、まだ読み書きができなかった (Braddy 1934, p.62)。しかしながら六年後、何度かの目の手術を経て、彼女は視力をかなり取り戻しただけでなく、卒業生総代にもなっていた。このように言葉が、彼女の場合はより正確にいうと自分自身で読み書きする能力が、彼女の人生にもたらした変容効果は、彼女の心に鮮明に残った。要するに、アン・サリバンの話自体もまた、多くの人々が彼女の子ども時代はなかったと考えるような苦難にあったにも関わらず、後年になってから迅速に言語を習得した例といえる。彼女は 20 歳で学校を卒業した翌年に、ヘレン・ケラーの指導のために派遣された。


3. サリバンの教育方法と指文字アルファベットの使用

もちろんヘレン・ケラーは隔離されて育ったわけではなかったが、ほぼ 2 歳から 7 歳までは彼女は音に反応できなかったのも、まねることや理解することを始められる言語体系を、彼女に対して一貫して使う人はいなかった。サリバンがやってくると、彼女がヘレン・ケラーと「話す」ために、声の代わりとして指文字アルファベットを使ったことによって、その状況はただちに変わった。しかし指文字アルファベットを使って話すことはアメリカ式手話 (American Sign Language =ASL) のような手話を使うことと同じではない。手話では身ぶりによって意味を補うことができる。指文字アルファベット方式では、それぞれの文字ははっきり識別できる手指の位置によって表わされる (図参照)。この方式を使って、話すかわりに英語の単語や語句を形作る個々の文字が連続してヘレン・ケラーの手の中に綴られた。この方法はそれまで他の視聴覚障害の学生を教育するのに最も成功したものであることが証明されていた (Freeberg 2001, pp.35-37; Lamson 1878, pp.6-8; pp.369-373)。

先に述べたように、ヘレン・ケラーの時代の多くの人々は科学者も含めて、ヘレン・ケラーのように感覚機能がかなり限られた人が言語を習得し、教育が受けられるというのは不可能であると信じていた。そのために我々はサリバンが使った方法はとても複雑で難解であったと思いがちである。ところが驚いたことに、サリバンの方法はきわめて簡単であった。そのうえサリバン



が直観的に使った手法は、1880年代以降に明らかになってきた科学的根拠によって、今日ではさらに十全に説明できるものとなっている (Luria and Yudovich 1975; Perez-Pereira & Conti-Ramsden 1999, for example)。

サリバンは、母親が1歳から2歳ぐらいまでの、まだ言葉をおぼえていない子供と交流するときの方法を観察して、それと同じ方法でヘレン・ケラーと交流しようとした (Keller 2003a, p.231)。³⁾ サリバンは、母親が小さい子供と話すときにしていることに気づいて同じように、つねにその時々の内容に直接関係した単語や語句を使って、ヘレン・ケラーと話した。その方法で、子供は異なる言葉の断片と、具体的な状況の中のある要素とを関連付けることを学ぶ。また言葉と自分自身の行動を関連づけることも学ぶ。その上、母親はまず子供に言葉の中のすべての独立した音を作ることを教えてから、単語を言うわけではない。同様に、サリバンもヘレン・ケラーにまずすべての文字を教えるという事はしなかった。最初に個々の文字をすべて学ぶことはヘレン・ケラーにとって意味はなく、すぐに使えるものでもなかったからである。サリバンは時間を無駄にすることはなかった。彼女たちが最初に出会ったすぐその日に、サリバンはヘレン・ケラーに人形を与えながら、*d-o-l-l* ( 「人形」) というスペルを彼女

の手のなかに綴った。するとヘレン・ケラーはすぐに同じスペルを繰り返したのである。

サリバンはそれまで一度も教師であったことはなかったが、それに生かせるような迅速な学習の経験を個人的にもっていた。サリバン自身が、きわめて好奇心旺盛であったため、また好奇心の旺盛さが学ぶことに影響することに気づいていたために、彼女の主な手法は特にヘレン・ケラーが何かに興味をみせたとき、それに没頭させることであった。そのころ彼女は、動作と指文字アルファベットを使った言葉の両方を使ってヘレン・ケラーと交流していた。サリバンは様々な方法でヘレン・ケラーの生来の好奇心をさらに高めようと工夫を凝らした。例えばヘレン・ケラーの遊び友達と「話すこと」そして彼に指文字アルファベットを教えることによって、彼女が話かけられることを欲するように仕向けた (Keller 2003a, p.227)。⁴⁾ サリバンはヘレン・ケラーの関心を引かなかったすべての活動をすぐに止めるか、もしくはそれを修正することにも心がけた。

交流というものはすべて、その言葉自体が意味しているように一方的なものではない。サリバンもヘレン・ケラーに対してどんな種類の交流でも始めようと注意深く観察し、見守っていた。ヘレン・ケラーが示すそのような行動とは、自発的な注意が活性化され、彼女に学ぶ用意があることを示していた。このような時に、サリバンはヘレン・ケラーに応答するために、他のすべての行動をやめていた。実際のところ、ヘレン・ケラーが言語の有用性を理解する以前でも、彼女の手の中で単語を綴ってほしいとサリバンに示す新しい身振りを作り出していた。このようにして、サリバンはヘレン・ケラーが学習に最もよい心理状態にある時間の量を最大限に引き出すことができた。

サリバンと出会ってからおよそ一ヶ月後のこと、言葉の大躍進が起こった。一方の手に冷たい水がかかり、もう一方の手の中に *w-a-t-e-r* (水) とサリバンが綴ったとき、「水」に対してヘレン・ケラー自身が幼児期に “wa-wa” という単語を使っていた記憶が、彼女の手に綴られた指文字の単語とつながった。ヘレン・ケラーは指文字で綴られた言葉が、指遊び以上のもので非常に役立つにちがいないということがわかったのである。この理解のあり方の変化と、何がそれを実現させたかについては舞台や映画で数え切れないほど多く描かれており、また文献にも詳細が記されている (Keller

1955, pp.39-48; 2003a, pp.18-20; pp.230-231; 2003b, pp.168-170; Braddy 1934, p.126)。⁵⁾

4. 抽象的な言葉の段階的な使用と理解の実例

この後、ヘレン・ケラーの言葉の理解と使用は急速に増えていった。ヘレン・ケラーによるあらゆる言葉の使用が引き出されて進歩していった。彼女はますます複雑な質問をするようになり、サリバンはいつもすぐに、そしてできるだけ誠実に簡潔に答えることにしていた。この頃の彼女たちは決まった授業はしていなかったが、日々繰り返される普通の生活があった。それには、たいてい午前中の活動や遠足、昼食の後の休憩や静かな時間、そしてヘレン・ケラーと同じ年頃の子供との遊び時間や家族との交流などが含まれていた。そのような時間に言葉は自然に使われていたのである (Keller 2003a, pp.234-235)。⁶⁾

ここでの重要な点は、サリバンははじめ具体的で直接的な状況の意味を描写する、あるいははっきりさせるために言葉を用いていたことである。その後には彼女はこの言語の基盤を使って、絶えずヘレン・ケラーがいくらか理解できる単語を持ち込み、それらの単語をより抽象的な語彙と言語構造に結び付けた。新しい文脈のなかで当面必要なことが生じてくるためであった。下記の二つの実例はこれを説明している。これらの例で注目すべきことは、ひとたびある単語を話したら、ヘレン・ケラーはそれをすぐに使っていることである。最初の例は、1887年4月24日付けのサリバンの手紙であり、それはヘレン・ケラーが「水」を理解したポンプの出来事から2週間ほど経った時である。

金曜日に私たちが町へ行ったとき、たまたまある人がヘレンにキャンデーをくれました。彼女は小さなキャンデーをエプロンのポケットにしまって、残りを食べました。家に帰ると、ヘレンはお母さんを見つけて、自分から「赤ちゃんにキャンデーをあげる (Give baby candy)」と言いました。ケラー夫人が「だめなのー赤ちゃんは食べるのはだめなの (No—baby eat—no)」と綴りました。ヘレンは揺り籠に近づくと、ミルドレッドの口を手でさわって、自分の歯を指さしました。ケラー夫人が「歯 (teeth)」と綴ると、ヘレンは頭を振りながら、「赤ちゃん歯—

ない、赤ちゃん食べる一だめ (Baby teeth—no, baby eat—no)」と綴りました。もちろん、これは「赤ちゃんは歯がないので食べられない」という意味です (Keller 2003a, p.233)。⁷⁾

次の例は 1887 年 6 月 2 日付けのサリバンの手紙である。なおヘレン・ケラーは 1887 年の 5 月の終わりに読むことを習い始めて、6 月の中旬頃に書くことを始めた。

ある晩寝ようとしたとき、ヘレンが腕にしっかりと大きな本を抱えて眠っているのを見つけました。明らかに彼女は読みながら眠ってしまったのです。翌朝そのことを尋ねると、「本一泣く (Book—cry)」と言って、体を振ったり動かししたり、その他の恐怖の身振りをしました。私がこわい (afraid) という単語を教えると、彼女は、「ヘレンはこわくない。本はこわい。本は女の子といっしょに眠りたい」と言うのです。私はヘレンに、本はこわがってなんかないからケースの中で寝かせなくてはいけないし、「女の子」はベッドの中で本を読んではいけないということをお伝えしました (Keller 2003a, p.238)。⁸⁾

サリバンは見守りつづけ、自分と交流することをヘレン・ケラーにうながしていた。ひとたびヘレン・ケラーは言葉を使い始めると、次第により洗練された質問ができるようになった。先に述べたように、これらの質問はサリバンによってできるかぎり簡単に、かつ明確に答えられた。ヘレン・ケラーの質問もまた、彼女の理解の程度を表すようになり、サリバンが以前に説明したことのどこに不十分さがあったかを示すものになった。ヘレン・ケラーは新しい経験がさらなる洞察のきっかけとなったとき、しばしば以前の話題に戻ろうとした。彼女はサリバンによって試験をされることはなく、気にかかったことはなんでも自由に、恐れることなく質問するように教えられていた。ヘレン・ケラーの初期の質問のいくつかを挙げる。最初のものは 1887 年 7 月 31 日付けのサリバンの手紙からである。

「誰が卵の中にひよこを入れたの?」「なぜヴィニーは黒いの?」⁹⁾

「蚊は刺す—それはなぜ?」「蚊は刺さないことをわかるの?」¹⁰⁾

「お父さんはなぜ羊を殺したの？」(Keller 2003a, p.243)¹¹⁾

次の例は1887年8月28日付けの手紙である。わずか一ヶ月後のものであるが、ヘレン・ケラーの言語の理解と使用が迅速に進んだことが証明される。

「レイラはどこから赤ちゃんを持って来たの？ お医者さんはどこで赤ちゃんを見つけたらよいかどうして知ったの？ レイラはお医者さんにとっても小さい赤ちゃんを欲しいと言ったの？ お医者さんはどこでガイやプリンス（子犬のこと）を見つけたの？」「なぜエリザベスはイヴリンの妹なの？」(Keller 2003a, p.245)¹²⁾

5. 抽象概念を表す言葉の理解

ヘレン・ケラーが「愛」というような抽象的な概念をどのように理解し得たかについては、ほとんど想像し難いことと思われていたようである(Keller 1960; 2003b, p.29)。しかしその答えは、私達やすべての子供と同じように、彼女は体験を通してそれらをすでに理解し始めていたということにある。はじめに子供は、あることに気づき、そしてそれを説明するための言葉がないことに気づく。より正確に説明しようとすることは、子どもに新たな考えを思いつかせるかもしれないし、また以前の体験を別の考えに組み込むことができるようになるかもしれない。そうすると今度は、それを適切に表現するための新しい言葉が必要になる。このようにして私達は言語を使いながら、思考や着想を形成し、関連付け、分類してゆくのである。

たとえば私達は実際に、視聴覚障害の子供が健全な子供と同じように「巨人の歩き」（大股歩き）や「赤ちゃんの歩き」（小股歩き）をして遊んでいるところを見かける。注意深い親や教師は、彼らが行っていることに気づいて、それらの異なる大きさの歩幅を描写する形容詞を教える。そうするとその子供は、彼らの動作と発言が調和してその言葉を言う（もしくは綴るか身ぶりをやる）ようになるであろう。そのほかには何も説明する必要もなく、子供はこの方法で容易に理解し、学んでゆく。

次の例は1888年5月15日付けのサリバンの手紙であるが、サリバンは彼女自身の言葉で上記のことと同じ考えを説明している。同様の例はこの文

献の至る所にみられる。

私たちはセイヤー（以前あなたの牧師さんだった）夫妻と昼食をとりました。彼は、私がヘレンにどうやって形容詞や、親切とか幸福とかいう抽象的な概念の名称を教えたのかを尋ねました。私はこれと同じ質問をお医者さんたちから何回も受けました。実際にはきわめて簡単なことがらなのに、皆が驚くのは不思議なことですね。

ある概念が子供の心の中ではつきりできあがっている場合、その概念の名前を教えることは物の名前を教えることと同じようにやさしいことなのです。でも概念が子どもの心の中にまだ育っていない場合に、その単語を教えることは非常に困難です。経験や観察から子どもに、小さい・大きい・良い・悪い・甘い・すっぱいなどの概念ができていない場合には、子どもはそのことばを何に結びつけてよいかわからないでしょう (Keller 2003a, p.262)。¹³⁾

ヘレン・ケラーはまた連想を発展させることができ、そして異なる状況の中での刺激を鋭敏に識別することができた。しかし興味深いことに、生涯を通じて彼女に残された感覚機能である触覚、味覚、嗅覚は、実際には標準よりも敏感であったわけではないことが実験によって示されていた (Keller 2003a, pp.264-265; 2003b, p.11)。¹⁴⁾ その代わり過去の体験と関連させながら、残された感覚機能から受け取った情報を識別したり関連付けたりする能力を、他の人々が普通はそこまで発達させることができない程度にまで、発達させたのである。この能力についての記述はサリバンが1888年10月1日に記した報告書にある。

彼女は会話の中で、ある一つの単語におかれたどんなささやかな強調をも見分けることができ、手の筋肉のいろいろな運動や位置の変化の意味を発見することができる。彼女は親愛の情を示すやさしい抱擁や、賛成して手をたたくことや、もどかしがってひっぱることや、命令の力強い確固とした動きや、その他のさまざまな無数の感情を表すことばにすぐに反応する。彼女はこれらの情緒的な何気ないことばの判断に熟練してきて、ときには私たちの考えていることを言いあてることさえできる。

ヘレンに関する報告の中で、昨年私は、彼女が不可解な精神能力を働かせているように見えるいくつかの例についてのべた。しかし、それについて更に注意して考察した結果、現在では、この能力は、彼女が触れた人の感情を表す筋肉の変化を完全に把握した、ということであると説明できるように思う。彼女は周りの人たちの精神状態を確認する手段として、主として、この筋肉の感覚に頼らざるを得なかったのである。彼女は身体のいくつかの動きを怒りに、また他の動きを喜びに、また悲しみに結びつけることを学んだ。ある日、母親とアナグノス先生と外出しているときに、ある少年がかんしゃく玉を投げてケラー夫人を驚かせた。彼女は即座に母親の動きの変化を感じ、「何がこわいの？」と尋ねた。またあるとき彼女と広場を歩いているとき、私は警官が一人の男を警察署に連れて行くのを見た。私の感じた動揺は明らかに気づかれるほどの身体の変化をうんだ。なぜならヘレンは興奮して「何を見たの？」と尋ねた。

シンシナチの耳科医によって耳が検査されたときに、この不思議な能力の印象的な説明がなされた。彼女が音を感じることができるかどうかを見定めるためにいくつかの実験が試みられた。そこにいた人は皆彼女が口笛だけでなく声の調子をも聞き分けているように見えたので驚いた。彼女は首をかしげ、笑い、言われたことをまるで聞いているかのように反応した。そのとき私は彼女のそばに立って彼女の手を握っていた。彼女が私から何らかの印象をうけているのではないかと考えて、私は彼女の手をテーブルの上に置き、部屋の反対側に退いた。それから耳科医たちは更に実験を試み、まったくちがった結果を得た。ヘレンは実験の間身動きせず、何が起っているか理解しているような身振りを少しも示さなかった。私の提案で一人の紳士が彼女の手をとり、テストが再び続けられた。今度は彼女は話しかけられるたびに表情を変えたが、私が手を握っているときのようにはっきりした変化は示さなかった (Keller 2003a, p.265)。¹⁵⁾

ヘレン・ケラーの講演や書物の中で他の例を読むと、彼女が状況に応じて単語や語句を使うやり方は、他の子供たちにも見られるが、年長の子供たちや大人たちに見られるものとはかなり異なっている。私達はヘレン・ケ

ラーが用いた語に特別な意味を読み込もうとするかもしれない。なぜ彼女がある状況下でその発言をしたのかを理解することは容易ではない。子供たちの言葉には、彼らの短い人生の中ですでに体験したことがしばしば反映されており、単語や語句の使い方はまだ変化しやすいことを念頭におく必要がある (Luria 1981, pp.50-53)。もし私達が彼らはどんな体験をもっているかを知るならば、彼らの発言や行動をもっとよく理解できるようになる。たとえば、ある言葉が彼らにとってある感情的な意味をもっていたりするかもしれない。意味はその言葉とともにあった以前の体験と、その体験があったときに作られたであろう他のすべての連想とに基づいている。したがって「犬」という単語は、犬を飼い、ペットとして可愛がった子供と、犬に噛まれたことのある子供とではかなり違った意味を持つであろう。まさに言葉は以前の体験の詳細な記憶を思い出させるきっかけとなるのである。また、過去に起きたことと類似の体験をすると言葉や語句の記憶が呼び起こされることもあるだろう。

6. 子供時代に出会った「死」の最初の理解

上述したように、ある言葉についての子供の最初の理解は、彼らが最初にその語が使われたことに気が付いたときの文脈と、その語をどこまでその文脈や彼らの以前の体験の中にある他の要素と関連付けるかによって決まってくる。サリバンがやってきてからほぼ一年たった 1888 年 1 月 1 日付けの手紙の中で、サリバンはまず「死」という単語にともなったヘレン・ケラーの体験に言及している。彼女は次のように記している。

またある日、ヘレンは短いお話の中で、おじいさんということばを見つけると、彼女のおじいさんという意味で、「おじいさんはどこにいるの？」と彼女の母に尋ねました。ケラー夫人が、「おじいさんはお亡くなりになったのよ」と答えると、「お父さんが鉄砲で撃ったの？」ときき、「私は、夕食におじいさんをたべるでしょう」と付け加えました。死に関して彼女の唯一の知識は、食べ物と結びついています。彼女は彼女の父が山うずらや鹿や他の獲物を射止めることを知っているのです (Keller 2003a, p.256)。¹⁶⁾

しかしもう一年たつと、死に関連して参照できるヘレン・ケラーの体験が増えていた。それらについては、サリバンがパーキンス盲学校のために準備したヘレン・ケラーの進歩についての 1888 年 10 月 1 日付けの年次報告書のなかに次のように詳しく記されている。

昨年のヘレンについての報告の中で、彼女は死について、あるいは人間の埋葬については何もしらないということが述べられている。しかし生まれて初めて墓地に入ったとき、彼女はある感情の動きを示した。彼女の目は涙でいっぱいだった。

これと同じくらい注目すべきことが去年の夏に起きた。しかしそれについて述べる前に、私は彼女が今では死について知っているということを書いておこう。私が彼女を知る以前には、彼女は死んだにわたりや小鳥や他の小動物にいたずらしていた。前述の墓地訪問のしばらく後に、ヘレンはある事故で足をひどくけがした一頭の馬に興味を示すようになり、毎日会いに行った。けがをした足はまもなく悪化して、馬は梁からつりさげられた。馬は苦痛にうめき、ヘレンはそのうめき声を感じて悲しみでいっぱいになった。とうとう彼を殺さなければならなくなり、ヘレンがつぎに会いに行こうと言ったとき、私は馬は死んだと話してやった。彼女がこの単語を聞いたのはこれが最初である。私はこの時に、苦痛から解放してやるために馬は撃たれたのだということ、そしてそのあとで埋葬された、つまり土の中に入れられたということを彼女に説明した。馬が故意に撃たれたということは彼女にそれほど大きな印象を与えなかったと私は考えた。しかし、前に彼女がふれたことのある死んだ小鳥と同じように馬の生命が消えたということ、そして土の中に入れられたということは理解したと思う。この事件以来、機会あるごとに私は死んだという単語を使ったが、その意味についてはそれ以上説明はしなかった。

マサチューセッツ州のブリュースターを訪れたときに、ヘレンと私の友人がいっしょに墓地に行った。彼女はつぎつぎに墓石を調べ、そこに刻まれている名前を解説して喜んでいるようにみえた。彼女は花の匂いをかいたが、それを摘もうとはしなかった。私が彼女に摘んでやったとき、彼女は服にそれをつけるのを拒んだ。フローレンスという名前が浮

き彫りにされた大理石を見つけたときに、彼女は何かを探すようにして地面にかがみこんで、それから顔に困惑の表情をいっぱい浮かべて私を振り向き尋ねた。「かわいそうなフローレンスはどこにいるの？」私はその質問を無視しようとしたが、彼女はやめなかった。私の友だちの方を振り向いて、彼女は「かわいそうなフローレンスのために泣いたの？」と尋ねた。そして、「彼女は死んでしまったのでしょうか？誰が穴の中に埋めたの？」とさらにきいた。彼女が悲しい質問を続けるので私たちは墓地を出た。

フローレンスは私の友人の娘であり、彼女が死んだときにはまだ若い婦人であった。しかしヘレンは彼女のことについて何も聞かされていなかったし、私の友人に娘がいたことも知らなかった。ヘレンはフローレンスから人形とベッドと車をもらったことがあり、それを他の贈り物と同じように考え、扱っていた。

墓地の訪問を終えて家に帰ってから、彼女はこれらのおもちゃのしまってある押入れのほうにかけて行って、私の友人のところへもつくと「これはかわいそうなフローレンスのよ」と言った。彼女がどのようにして推察したかはわからないが、これは事実である。つぎの週に書かれた彼女の母親宛の手紙は、彼女の印象を彼女自身のことばで示している。

「私は私の小さな赤ちゃんたちをフローレンスのベッドで寝かせ、彼女の車にのせます。かわいそうなフローレンスは死にました。彼女は重い病気になって死にました。Hおばさんはかわいい子どものために泣きました。彼女は土の中にいます。そして彼女はとても汚れています。そして寒いです。フローレンスはサディのようにとともかわいらしかったです。Hおばさんは彼女にキスして強く抱きしめました。フローレンスは大きな穴の中でとても悲しんでいます。お医者さんは彼女が元気になるように薬をくださいましたが、かわいそうなフローレンスはよくなりませんでした。彼女は重い病気になったとき、ベッドの中でのうちまわり、うめきました。Hおばさんはそのうち彼女に会いにいくでしょう。」(Keller 2003a, p.266)¹⁷⁾

ここにはいくつかの興味深い事柄がある。たとえば、ヘレン・ケラーが墓

地で特に取り乱していたかどうかは記されていないが、他人の感情の状態を見極める彼女の鋭敏な能力によってサリバンとその友人が取り乱しているのを認識したのであろう。このことと、彼らの墓地への訪問が何の説明もなくすぐに終わったという事実は、この体験にたいする彼女の特別な注意を引き起こしたであろう。また彼女が記憶をたどって過去の体験を組み合わせながら、何が起きたのかについて彼女自身の解釈を組み立てることを促したにちがいない。

そのため上記の文で重要なのは、最後の段落にあるヘレン・ケラーが死についての理解を表している彼女自身の言葉である。そこに彼女の過去の体験がはっきりと見て取れる。その中には馬の死、自分自身の病気と医者にまつわる体験、さらに、もし地面に掘られた穴の中に入れられたらどんな思いがするかというフローレンスへの感情移入でさえ含まれている。彼女は彼女の父が狩った小さい動物に感じた命の喪失の理解、そして苦痛の中にいる子どもへの悲しみと愛の表現を示している。それから彼女は、サリバンの友人がまたすぐ墓地を訪ねていくという意味と思われる「Hおばさんはそのうち彼女に会いにいくでしょう」という言葉で締めくくっている。あるいは彼女が今まで読んだ全ての物語が幸せな結末であったので、単にそのように終わらせたのかもしれない。私達には確かなことはわからないが、彼女の過去の体験について少しでも知るならば、よりの確かな推測できるようになる。

いずれにしてもこれは、どのようにして子どもが理解し始めるかを示すよい例である。子どもは、体験のなかで印象づけられた情報をつなぎ合わせて連想を加え、そして彼らのユニークなやり方で言葉に表現することによって理解するのである。このようにして子どもはさしあたって彼らにとって満足できる真実の見方に到達する。ヘレン・ケラーの死に対する最初の理解は決して間違っていなかった。しばらくはその見方で十分であったが、それには順応性があり、新しい体験が彼女に物事の違った見方をさせるようになったとき、死についての理解も変化してゆくことができた。

参考文献

- Braddy, N. (1934): *Anne Sullivan Macy, the story behind Helen Keller*. Garden City, NY: Doubleday, Doran, and Company, Inc.
- Freeberg, E. (2001): *The education of Laura Bridgman, the first deaf and blind person to learn language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Keller, H. (1960): *My religion*. New York: Swedenborg Foundation, Inc. (Original work published 1927).
- Keller, H. (1955): *Teacher, Anne Sullivan Macy: A tribute by the foster-child of her mind*. Garden City, New York: Doubleday and Company, Inc.
- Keller, H. (2003a): *The story of my life: the restored edition*. New York: The Modern Library (Original work published 1903).
- Keller, H. (2003b): *The world I live in*. New York: New York Review Books. (Original work published 1908).
- Lamson, M. (1878): *The life and education of Laura Dewey Bridgman, the deaf, dumb, and blind girl*. Boston: New England Publishing Company.
- Luria, A. R. (1981): *Language and cognition*. Washington D. C.: V. H. Winston and Sons.
- Luria, A. R. and Yudovich, F. (1975): *Speech and the development of mental processes in the child*. Middlesex, England: Penguin Books.
- Perez-Pereira, M., & Conti-Ramsden, G. (1999): *Language development and social interaction in blind children*. East Sussex, UK: Psychology Press, Ltd.

邦訳文献リスト

- ヘレン・ケラー 1966:『わたしの生涯』(岩橋武夫訳) 角川書店 (角川文庫)。なおこの訳書のなかの「濁流を乗り越って」と「闇に光を」の部分 (160-501 頁) は Keller, H., *Midstream, my later life*, 1929 の邦訳である。
- ヘレン・ケラー 2004:『奇跡の人 ヘレン・ケラー自伝』(小倉慶郎訳) 新潮社 (新潮文庫)。
- アン・サリバン 1973:『ヘレン・ケラーはどう教育されたか—サリバン先生の記録—』(槇恭子訳) 明治図書出版 (1995 年一部改訳改版)。

訳注

- 1) Keller 2003a; 第一部の邦訳：ヘレン・ケラー 1966, pp.9-159；ヘレン・ケラー 2004. 第三部の邦訳：アン・サリバン 1973.
- 2) ヘレン・ケラー 1966, p.24; ヘレン・ケラー 2004, p.26 参照。
- 3) アン・サリバン 1973, pp.33-35 参照。
- 4) アン・サリバン 1973, pp.25-26 参照。
- 5) Keller 2003a, pp.18-20 についてはヘレン・ケラー 1966, pp.29-32; ヘレン・ケラー 2004, pp.33-36 参照。Keller 2003a, pp.230-231 についてはアン・サリバン 1973, pp.31-33 参照。
- 6) アン・サリバン 1973, pp.39-40 参照。
- 7) アン・サリバン 1973, pp.36-37 より転載。
- 8) アン・サリバン 1973, p.46 より転載。
- 9) ヴィニーはヘレン・ケラーの黒人の乳母。
- 10) 原文には「蚊」ではなく、「蠅」(flies) とある。
- 11) アン・サリバン 1973, p.56 より転載。
- 12) アン・サリバン 1973, p.58 より転載。
- 13) アン・サリバン 1973, p.87-88 より転載。
- 14) Keller 2003a, pp.264-265 についてはアン・サリバン 1973, pp.91-92 参照。
- 15) アン・サリバン 1973, pp.92-93 より転載。
- 16) アン・サリバン 1973, pp.77-78 より転載。
- 17) アン・サリバン 1973, pp.93-95 より転載。

(笠谷美穂 訳)

One Child's Understanding: A Description of Helen Keller's First Encounters with Death

by Miriam T. BLACK

Helen Keller (1880-1968) was called, “the greatest woman of our age,” by Winston Churchill. To this day, Keller’s rapid acquisition of language though deafblind, and the transforming effect the ability to use language had on her mental development continue to intrigue researchers. In this article, a brief introduction to Keller and her teacher Anne Sullivan first will be presented, together with an explanation of how Keller learned language and how her increasing use of language enhanced her ability to understand the world around her. Then, several passages taken from Keller’s autobiography that describe her gradual knowledge of abstract concepts and her first encounters with death will be presented and briefly discussed.